

小学校教師による小3社会科“身近な地域や市”の教材研究—1枚の写真を通して

## 神社の森(鎮守の森)で学ぼう

作成：立花禎唯（たちばな よしただ／大阪府高槻市立大冠小学校 教諭）

寸評：山下宏文（やました ひろぶみ／京都教育大学 教授）\*

語り：「電車に乗って窓から外をながめていると、住宅や田畑の間にこんもりと盛り上がった森が見えることがあります。それは、たいていは神社の森(鎮守の森)です。盛り上がって見えるのは、大小のいろいろな種類の木があるからです。公園や街路樹の木を林とすると、鎮守の森は立派な森です。都会では、鎮守の森が地域で唯一の森というところも少なくありません。

では、なぜ神社にはたいてい森があるのでしょうか。大昔は、“神社”や“社”をモリと読んでいました。つまり、最初からあったのは“土地の神が坐す森”で、鳥居や建物はあとから建てられたものです。

高槻市には、春日神社という名前の神社がたくさんあります。京都に都があったころ、高い位についていた藤原氏の土地が、高槻にもたくさんありました。そこで、藤原氏の氏神様である春日大社の神様を祀ったのです。また、天井川になっている川の近くの神社には、スサノオをはじめ水と関係がある神様を、洪水が起こらないように祀っ



◀春日神社（高槻市東天川二丁目）

ています。このように、神社を調べることで身近な地域や市の昔の様子を想像することができます。

森があるということは水があるということです。大きな木だけではなく、下草なども生えます。アメバ、ゾウリムシなどの小さな生き物もいます。いろいろな動植物があると虫や鳥や動物もやってきます。一度、身近な地域や市の鎮守の森に行ってみてはどうでしょうか。朝は特に気持ちがいいですよ。」

意図（立花）：戦前戦中の教育の反動から、神話は教育現場においては一種タブーのような扱いであった。学習指導要領に「神話や伝承」が明示されてからも状況は大きく変わっていない。歴史学・文学・神話学などの研究も進み、神話を歴史としてではなく、神話そのものとして教えることは、身近な地域や市の風土を理解するうえで重要なことだと考える。近年、社叢学会も発足し、学際的な社叢(鎮守の森)の研究も進んでいる。森林は、都市部では遠くに望むもの、農村部ではあって当たり前のもので、子どもたちに意識させることが難しい。社叢はどちらにおいても体験をともなった学習の教材となる。「土地の神が坐す森」で学習することで、人と森林の関係をも学ばせることができる。

寸評（山下）：社会科では、「伝統や文化に関する内容の充実を図る」ことが強調された。また、「地域資源の保護・活用などの観点を重視して」とも言われている。こうした要求に、地域にある神社やその森は、とても優れた教材になりうるのではないだろうか。日本人の森(自然)とのかかわりやそこから生み出された文化(森林文化)などに迫ってゆくことができるからである。

\*山下…〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1 Tel 075-644-8219 (直通)